

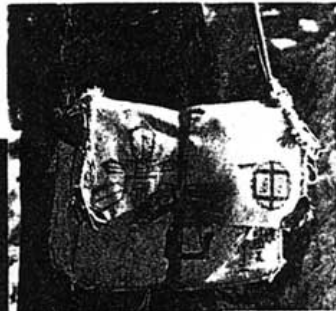
※偶数ページは右端の原稿が切れています。御容赦ください。

ンであれば、日米女性ジョッキー対抗レースの行われた公営競馬場のある町としても知られている。水沢高校はこの町の中心的な高校だ。ここに目指すバンカラがいる。

水沢高校を訪れたのは理由がある。水沢高校が旧制中学ではなく、戦後のいわゆる新制高校であるということ(正確を記せば戦前は女学校)。旧制中学の流れもくまず、戦後生まれという伝統面でのハンデキャップの中で、水高生はどのようにバンカラを育て上げていったのか、興味は、そこにもあった。

始業時刻に近い水沢駅。改札口へ急ぐ高校生の中で、バンカラの生徒はやはり目立つ。一般の男子生徒とさえ白線入りの帽子はヨレヨレであることが多い。そんな中でもバンカラは一際輝いてみえるのである。バンカラが輝くというのは妙な表現だが、威圧感ともいうのだろうか、彼らのまわりだけがなぜか大人びてみえるから不思議である。東京の高校生を見なれた目には、一つも二つも年上に見えてしまうのだ。

水沢高校の応援団長佐々木まこと君の姿も、改札口に向かう高校生の流れの中に見ることができた。学校に向かう彼のあとを追う。その道すじ、小さな町角のあちこちから彼のあとを追うように、バンカラの学生がつきつきと現れたのには驚いた。バンカラ度は佐々木君よりも過激である。



素足に高下駄。学生服は変色し、ズックの肩から下げるバッグは「質実剛健」などの文字で埋めつくされている。

帽子には、明らかに男の手と分かる縫い目が見えてポロポロ、つばは真ん中から折れて、しかも力なく顔の上部をおおいかくすように垂れている。ロングヘアというよりも長髪がウェーブなして肩口まで届く。

マントの学生も二人ばかり。しかし、寒さをしのぐという意味においては、それは全く意味をなさないように思えた。雪道をひきすってきたマントのすそはぐつしよりと濡れ、裸足にまわりつく。しかし、誰もが威圧感を感じさせはするが、都会の硬派と自称する連中よりもすがすがしい印象が残る。

始業前のひととき、屋上において応援団リーダーによる校歌がうたわれる。遠くまで届くその声だが、何を言っているのか全然分からない。

青春をまとう、みちのくの若者たち

目の前に座った佐々木君をはじめとする応援団リーダーたちは皆寡黙だった。うっかりヘタな質問でもしようものなら、何も言わず席を立てて出ていってしまうような雰囲気だ。「昔風バンカラ・ファッションをまとう高校生に現代っ子の素顔を見た」というテーマは早くもくすされる。

「俺たちは好きてバンカラをやっている。バンカラをやるやらないも個人の自由だと思います」

「俺たちのバンカラを、うわべのファッションだけだと思っている人もいます」

「バンカラの意味や考えは、言い切ることもしできないし、最後まで分からないのではないか」



彼らはきわめて真面目に答えてくれる。彼ら現役のパンカラには、パンカラの意味を聞くことは酷なことには違いない。「なぜなら、あなたもなぜ青春をしていますか」という質問と同意だからだ。青春という言葉も部会の中には消え失せた言葉だ。せいぜいがお笑いタレントのパロディの中に生存するに過ぎない。「なぜ青春をするのか」という、設問にもならないこの種の命題（旧制高校生にいわせればテーゼだろうか）は、高校生として過ごすこの年代の苦者にとって、因数分解を解くよりも難しい問題に違いない。

青春や人生が、パンカラという言葉に置き変わっただけにすぎない。こういう意味で佐々木君が別れ際にふともらした言葉、「今となればキュークツだと感じることもあります」というのはごく自然な感想なのだろう。そういう意味からすれば、一年生のパンカラ予備群の学生たちは、応援団リーダーを務める二年生よりも、はるかにパンカラを遊んでいる。先輩の見よう見真似あるいは先輩からのパンカラ小



道具一式の伝授により、パンカラファクションを身にまといはじめた彼らは、顔には出さなくても、嬉しさがにじみ出ている。つい先日まで

中学生、子供という自覚の中にいた人間が、今日は肩でマントをひるがえしながら年上の人間たちと交じって登校するのである。うれしくないはずがない。

だからこそパンカラをすら抜き通す意地もてる。雪道で、裸足の指を赤くしたとしても下駄を捨てることはしない。実際には「とても冷たい」。



パンカラを指した動機は「あこがれ」。たぶん本音に違いない。中学生の当時、彼らは年上のパンカラ高校生をみてどのように思ったのか。当時からそれはあこがれの対象だったのか。「なんてキタネカッコしてるんだべ」と思っていたと、彼らの大半はいう。

童から大人へ。新入生をおそう大ショック

パンカラへのあこがれは突如入学式に始まる。他県の高校と比較したわけではないが、岩手県の高校には旧制高校の寮にみられたような、新入生に対して高校生の自覚を自覚めさせるような洗礼式の風潮がまだまだ残っている。洗礼式といっても暴力に

よるわけではない。つい昨日まで中学生だった新入生の心胆を寒からしめるような、大ショックだ。入学式の翌日、授業はまだオリエンテーションの段階である。昼食時、弁当のフタを開けたとたん、それはなだれこんでくる。

手には団旗の竹ざおを持ち、それで机を打ち鳴らしながら応援団リーダーが校歌と応援歌を教えるくるのだ。昼食時という本来なら楽しい時間に、あまりにも悲惨な光景が展開する。全然聞いたことのない校歌を、いきなり歌えと、言う。知りませんと、言う。うものなら、自分たちの学校

分たらの学校

と怒鳴り返される。

見れば応援団リーダーはヒゲ面で帽子、学生服はボロボロのバンカラ。見るからに恐ろしい。男は顔面蒼白。女の子にいたっては泣きだしてしまっただけである。誰もが「こんな学校に来るんじゃないか」と思うのも当然である。これが一週間も続く。先生や上級生はニヤニヤするばかりで、決して一年生を救おうとはしない。旧制高校の風土はバンカラだけではなく、こんなところにも生き残っている。

バンカラを守る風土

バンカラが続いている秘密を、学生側の青春の主張ですべて解決するのは無理がある。生徒個人にすれば、彼らは三年間しか在校しない。バンカラ意識はそこで途切れる。しかし伝統という名において、それは次の人々に手渡されてゆく。

お気づきかと思うが、学校側がバンカラを服装規定等で押さえつけてしまえば、それは完全に消滅してしまうに違いない。しかし、現にバンカラは残っている。どうも学校側の方に、バンカラを奨励する風潮があるようだ。奨励というのは言葉が悪い。教師もバンカラを愛すると言い変えた方がよい。

ちなみに、バンカラ生徒は決して問題児ではない。成績は優秀、過去の行動や実績にも学校側が規制する材料はない。高校生の実質がともなっていれば、それによしとする自由と信頼の関係がいまだに残っているというべきか。

教師側と生徒側との自由と信頼の関係こそが、旧制高校の愛すべき、懐かしむべき風土だったといわれている。それらの風土をぬきにしてはバンカラも今日まで生き残ってはこなかったのではないか。教師側こそ旧制高校の精神が残っていたとは、あまりにも飛躍した導き方だろうか。でも、なぜ若手だけに。

それには水沢高校の校長先生が答えてくれた。



校長先生が時折出席される白線会(旧制高校出身者の会)でも、同様の質問がなされることがあり、そのつど、岩手県には旧制高校がなかったため、それだけあこがれが強く真似をしたかったのではないかという意見が大勢を占めるという。

また、「昔は誰もがバンカラだったのです。好き嫌いではなく、バンカラにならざるをえなかったのでしょう。それが今日まで一部ファッションとして残っているのでは」という意見も出るという。しかし、校長先生の見方はもう少し鋭い。岩手県は、その地形からいって、一関を開かれた口に見たと、ちょうどフラスコ状の形になる。一関にフ

風土も気質も、そこでは目に見えるほどの変化をこさない。現代の高校生のマイナス面に向かうファッション、たとえば、ツッパリ、リーゼント、長い学ランの入り込む余地はなく、ここに入ったとしてもバンカラという強力なリンパ菌がそれを駆除してゆく。だから、フタとなる一関一高生のバンカラは、県内でも一番過激なのだ。

バンカラ学生は成績も優秀だと先にも書いた。実は県内にバンカラが残る高校は、すべて進学率の高いエリート校といえるのだ。むしろ「バンカラはエリートの証明」——そうとらえられるのが、学校側がバンカラ学生に対する懸念だと校長先生は言う。新幹線が盛岡まで延び、情報が全国均一化をみせる今日、バンカラの消える日も近いと心配する地元の声もある。各校のOBたちも口をそろえて自分たちの時代のよさを力説する。

小京都といわれる盛岡でさえも、バンカラ学生が似合う街なみが極端に少なくなっている。しかし、それでも青春の稚気はなくなることはないだろう。今の学生のバンカラはファッションで、旧制高校のような実質をともなっていないという大人の声も彼らに届く。しかし、心配しなくてもいい。旧制二高を卒業された水沢高校の校長先生は、

「自分たちの時代も実質はありはしなかった。それは今の学生と同じように、先輩に対するあこがれからバンカラを始めたのだ」と言ってくれた。みちのくのバンカラたちよ、君たちが最後のバンカラであって欲しくはない。誰もが街の風景のように愛する君たちの姿は、先輩が力強く残し、伝え続けてきたものだから。

